

榊原 洋一  
(Sakakihara Yoichi)



医学博士、御茶ノ水女子大学 子ども発達教育研究センター教授。日本子ども学会常任理事。専門は小児神経学、発達神経学特に注意欠陥多動性障害、アスペルガー症候群などの発達障害の臨床と脳科学。趣味は登山、音楽鑑賞、二男一女の父。

1951年東京生まれ。1976年東京大学医学部卒。東京大学小児科講師を経て、現在 御茶ノ水女子大学 子ども発達教育研究センター教授。

主な著書:「オムツをしたサル」講談社、「集中できない子どもたち」小学館、「多動性障害児」講談社+α新書、「アスペルガー症候群と学習障害」講談社+α新書、「ADHDの医学」(学研)、「はじめての育児百科」(小学館)、「Dr.サカキハラのADHDの医学」(学研)、「子どもの脳の発達 臨界期・敏感期」(講談社+α新書)など。

## 子どもの心の発達とその障害

御茶ノ水女子大学 子ども発達教育研究センター教授  
榊原 洋一 (医学博士)

以前は、人の新生児はまったく白紙の状態生まれ、乳児を取り囲む環境や物、そしてほかの人からのさまざまな働きかけによる刺激によって、知能や社会性が発達してゆくと考えられていました。

現在は、そうした「経験説」が正しくないことが分かっています。人の乳児には、生まれつき(生得的)な学習や言語獲得能力がすでに備わっており(発達のプログラム)、それが生育環境と相互に関係しながら、発達してゆくというのが、現在の発達観です。

生得的な能力は、遺伝子によって規定されています。しかし遺伝子によって規定されたさまざまな能力は環境によって変容することも事実です。

アメリカの心理学者ガードナーは、人の心を理解するために多重知能説を提案し、従来のような知能指数ではなく、知能を7つのモジュールに分けて人の多様な能力を説明しています。ガードナーによれば、人の知能は①数学・論理的知能 ②言語知能 ③空間的知能 ④身体運動知能 ⑤音楽知能 ⑥対人的知能 ⑦個人内知能 の7つに分かれるといえます。

こうしたさまざまな知能を、乳児は積極的に身につけてゆきます。周りの様子を観察しながら、物体の運動や、因果関係、などについて、何も教えなくても理解してゆきます。乳児は、周囲の人の目と口元に特に関心を持って見つめ、他人の視線や、表情を生後数ヶ月で理解するようになります。人見知りや、乳児が顔の識別をする能力を身につけた証拠です。1歳ころの乳児は、人間にしかない脳の高次機能である言葉を理解し、しゃべるようになります。他人の表情や視線、そして言葉を理解することは、社会性の発達の基礎になります。

このように、人間の乳児はきわめて優秀な学習能力をもって、心を発達させてゆきますが、それがうまく行かないこともあります。子どもの心の発達の障害は、生まれつきのもので、生育環境によるものがあります。近年世界中で注目されている自閉症や多動性障害などの発達障害は、生得的な脳機能障害のひとつです。

さらに、ストレス、ネグレクト、過干渉などの生育環境が心の発達の障害を引き起こすこともよく知られています。